

クォーター制導入による教育効果と課題 —初修中国語を中心に—

王 少 鋒*

Educational Effects and Issues of Introducing the Quarter System —Focusing on Introductory Chinese Courses—

Shaofeng WANG*

要 旨

大阪電気通信大学はカリキュラムの改革に伴い2015年度より学期を4つに分ける「クォーター制」を一部の科目に導入し、初修外国語科目においては中国語が実験的にクォーター制を導入した。初年次の教育実践を終えて、その教育効果と課題をセメスター制と比較しながら報告する。

1. はじめに

「クォーター（4分の1）制」とは、1年を4学期に分割して授業を開講し、1つのクォーターを8週間とし、同じ科目を週2回実施する制度である。海外では珍しくないが日本の大学の授業はこれまで殆ど「前期」「後期」のセメスター制で「週1回15週」が主流となっている。近年一部の大学が国際化に向けてクォーター制を導入し始め、大阪電気通信大学も2015年度より一部の学科の科目にクォーター制を導入した。

2015年4月クォーター制を導入した際に初修外国語科目のなかで中国語が試験的に導入したが、現在のカリキュラムでは「中国語1」「中国語2」「中国語3」の3科目しか開講されていないために年間4クォーターではなく実質的に3クォーターとなっている状態である。4月にスタートした「中国語1」は8週間で終了し、試験が終わった翌週の6月には「中国語2」へ進み、夏休み前には2科目が終了している。「中国語3」は9月からスタートし11月には終了し、セメスター制と比べると短期間に集中的に学ぶことができる。

「中国語3」の終了時に中国語検定試験の過去問題を用いてテストした結果、多数の学生は中国語検定試験準4級相当レベルに達していた。高い教育効果が得られただけでなく3クォーター終了後に行ったアンケート調査からは学生の満足度も非常に高いことが分かった。

なお、3クォーター終了時の2015年11月に任意で中国語検定試験を受けた受講生のうち7名が準4級に合格し、1名が4級に合格している。経済的な負担もあるために一部の受講生しか受け

*大阪電気通信大学 工学部人間科学研究センター准教授

てないが、短期間で検定試験に合格して資格を取得できたことは大きな成果となった。

2. クォーター制の教育効果

セメスター制と比較するとクォーター制にはさまざまなメリットがあり、特に初修外国語科目にはその教育効果が顕著である。その教育効果をテストとアンケート調査及び教員の分析の3つの側面から検証してみる。

2015年度に寝屋川学舎がクォーター制を実施した際に偶々四條畷学舎のセメスター制科目「中国語初級」の担当者に欠員が生じ、クォーター制の教育効果を確かめる良い機会だと考え、四條畷の「中国語初級」も1コマを担当し、1年間の教育実践を通してクォーター制とセメスター制の教育効果を比較してみることにした。

具体的には、同一担当者が同一教科書を使用し「中国語1」と「中国語2」の終了後に同一テストを実施し、週1回と週2回学ぶことによる成績の違いを比較したのである。

統一教科書は拙著の『最短中検合格プログラム準4級』¹⁾を使用した。授業内容はインプット理論とStephen Krashenらの第2外国語教育のためのガイドライン²⁾に基づいて事前に授業内容プランを作り、具体的には90分授業時間を下記の配分で行った。

- ①動機づけ 5分
- ②復習のインプット 10分
- ③新教材の耳からのインプット 15分
- ④新教材の読解によるインプット 20分
- ⑤創造的発表活動 20分
- ⑥練習問題 20分

上記の時間配分についてはクォーター制クラスもセメスター制クラスもまったく同じ配分で行い、極力両キャンパスで同じ進め方をした。

2.1 同一テストによる学習効果の比較

外国語におけるクォーター制とセメスター制の教育効果を比較するために寝屋川学舎のクォーター制グループと四條畷学舎のそれとの2群比較する被験者群間実験³⁾を実施した。

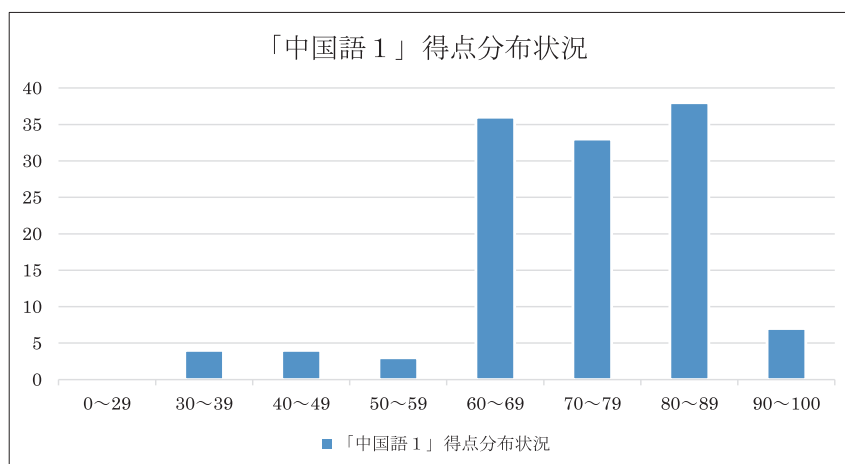
実験方法としては中国語検定試験準4級の過去問題を用いてそれぞれの科目の終了時にテストを行った。そのテスト結果は下記の通りである。

①クォーター制「中国語1」のテスト結果

受験者数	124名
60点以上	113名
59点以下	11名
合格率	92.5%
平均点	70.2点

得点分布状況

0～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80～89	90～100
0人	4人	4人	3人	36人	33人	38人	7人

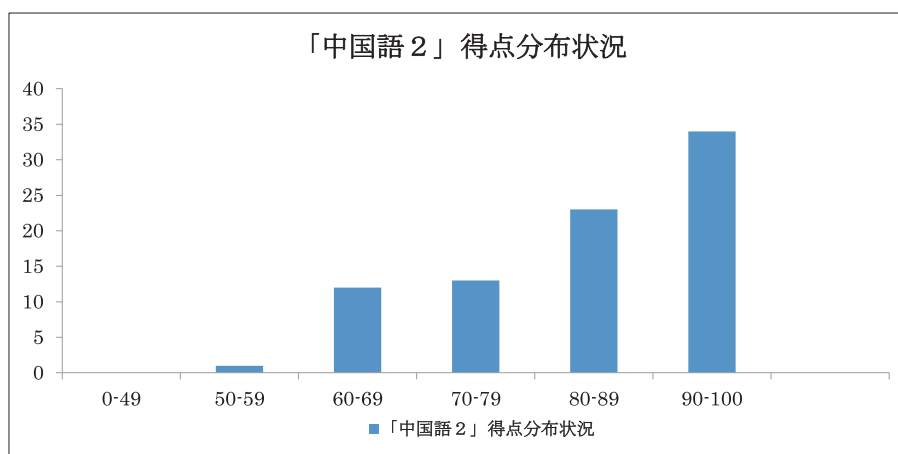


②クォーター制「中国語2」のテスト結果

受験者数 84名
 60点以上 83名
 59点以下 1名
 合格率 98.9%
 平均点 87.1点

得点分布状況

0～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80～89	90～100
0	0	0	1	5	11	20	47



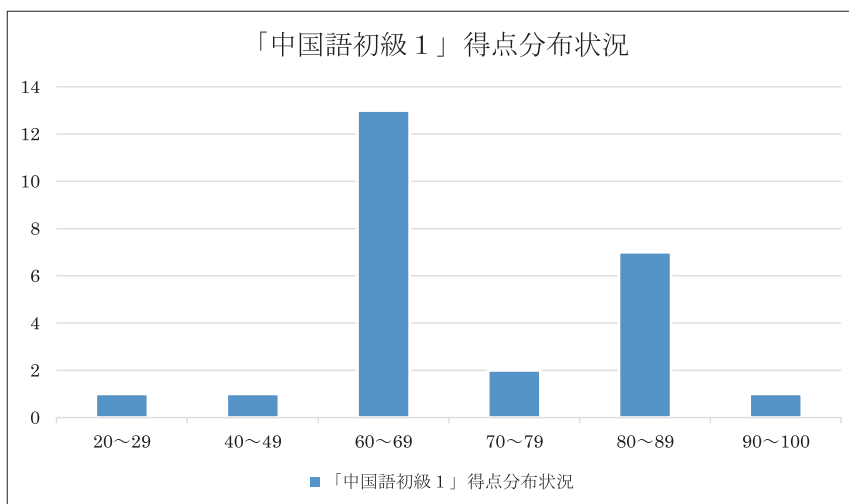
③セメスター制の前期科目「中国語初級1」のテスト結果

受験者数 25名
 60点以上 23名
 59点以下 2名
 合格率 92%

平均点 63.8点

得点分布状況

0～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80～89	90～100
1人	0人	1人	0人	13人	2人	7人	1人

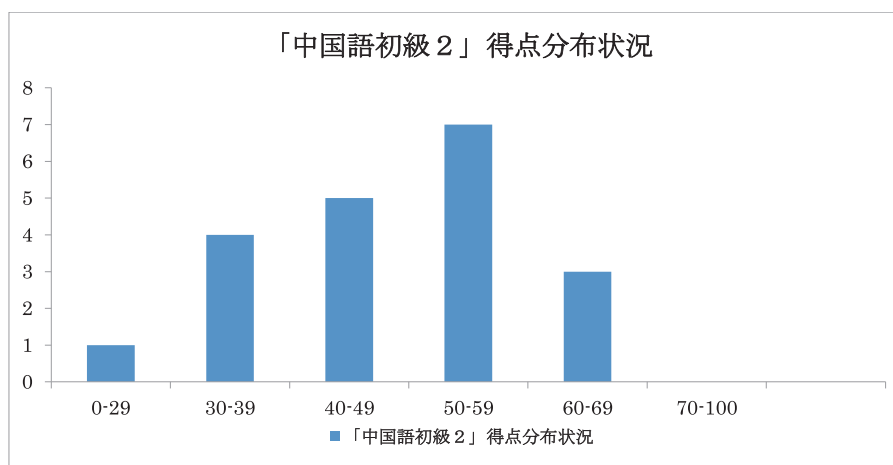


②セメスター制の後期科目「中国語初級2」のテスト結果

受験者数 20名
60点以上 3名
59点以下 18名
合格率 15%
平均点 47.8点

得点分布状況

0～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80～89	90～100
1人	4人	5人	7人	3人	0人	0人	0人



以上のテスト結果からクォーター制の受講生の成績が総じてセメスター制より良いこと、特に「中国語2」の成績の差が顕著であることが分かる。

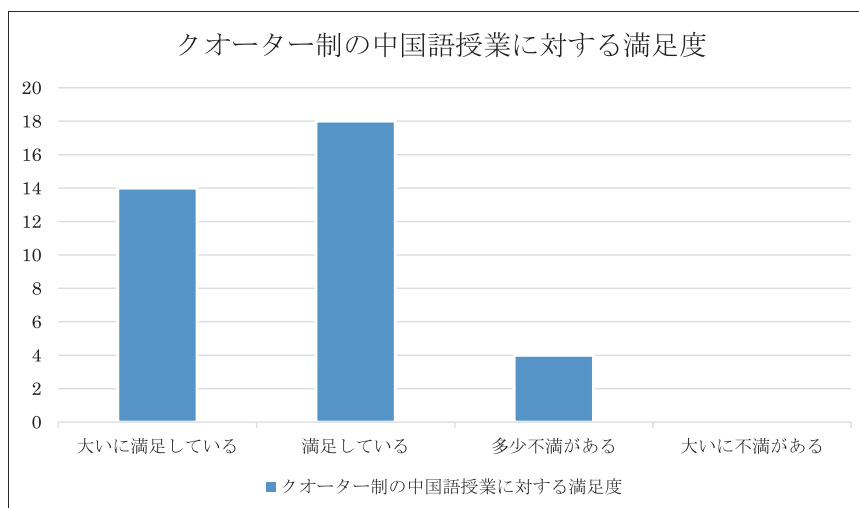
「中国語1」と「中国語初級1」の合格率では、クォーター制で92.5%であり、セメスター制の92%とあまり差は無かった。しかし、平均点ではクォーター制で70.2点であり、セメスター制の63.8点と比べて有意差があった。さらに、引き続き行った「中国語2」と「中国語初級2」の合格率と平均点は、クォーター制では98.8%と87.1点であり、セメスター制の15%と47.8点と比べるとクォーター制の重要性が明らかとなった。

2.2 学生の満足度調査

「中国語3」授業終了後にクォーター制について学生にアンケート調査を行った。回答者は36人。

クォーター制の中国語授業に対する満足度については下記の結果になった。

- ① 大いに満足している 38.8%
- ② 満足している 50%
- ③ 多少不満がある 11%
- ④ 大いに不満がある 0%



「大いに満足した」理由は具体的に見ると殆どはクォーター制の制度そのものに関するものである。

- 短時間での単位、学力の取得
- しんどすぎず疲れすぎないぐらいの授業回数と時間だから
- 前後期と後後期に少し余裕ができるから、アルバイトや車の教習に行ける。課外活動に専念できる。
- クォーター制が一番
- やっていることが忘れにくい。
- 学ぶ期間が短くてとても覚えやすい。
- 他の授業より早く単位を取れるので良かった。
- 週1回では忘れることが多いので、週2回はとても学習できたと思ったから。
- 授業回数が多かったが週2回することで理解しやすかった。
- 思っていた以上に難易度が易しく、授業を楽しく学習できたから。

クォーター制以外の理由としては、

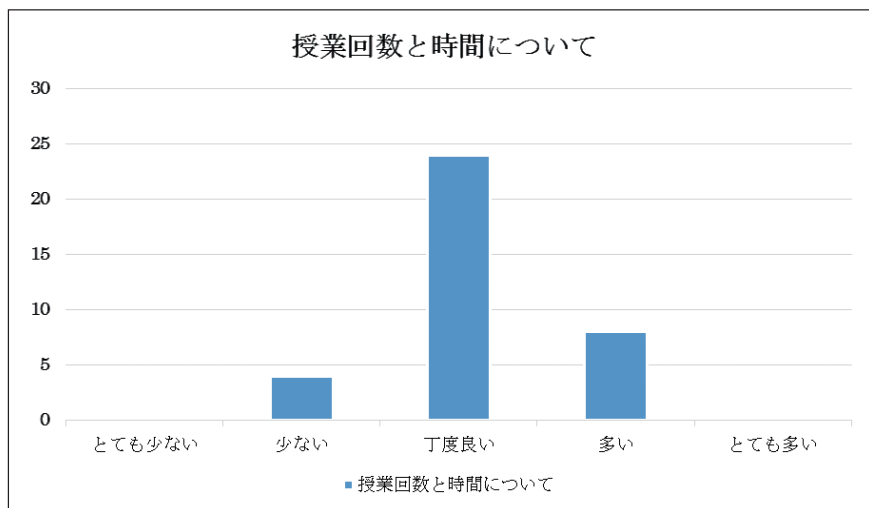
- Feeling
- 資格に向けて授業をやっていたから。
- 先生と話しやすかったから。
- 先生に質問しやすい。

「満足している」理由についても下記のようにクォーター制の制度に関することなどがあげられている。

- 週2回になっているため、次の週になっても前の授業の内容をちゃんと思い出せるようになったから。
- クォーター制の方が覚えやすかった。
- 急いで進まずにゆっくり学べたのが良かった。
- 短時間だったけど集中的に学ぶことができたから。
- 1週間、空いたら忘れるけど、2、3日なら覚えているから。
- 本当に丁度良かったです。
- 楽しかったから
- 週2は忘れない。
- 悪い所が無いから。
- 王さんが面白いから。
- 少しだけですが、中国人の友達と中国語で会話できるようになったから。

週2回授業があるクォーター制の授業回数と時間についての質問に対する回答は下記の通りである。

- ① とても少ない 0%
- ② 少ない 11%
- ③ 丁度良い 66.6%
- ④ 多い 22%
- ⑤ とても多い 0%



2.3 教員の立場から

一年間の教育実践を通して教員としてクォーター制の利点を下記のように感じている。

① 初年次教育に関して

新入生に週2回も接する機会があり、特に語学科目は講義科目よりも学生とコミュニケーションを取る機会が多いので、いち早く新入生の動向を把握できる。その結果、大学での学習生活への戸惑いなどに関して適切なアドバイスができ、大学適応の手助けにもなる。

Semester制のクラスでは前期の試験内容や結果を学生にフィードバックするのは後期授業開始時になるが、その時は既にその科目を脱落する学生もいれば、多数の科目を不合格にされた学生は留年や退学などに繋がるケースもある。

クォーター制の場合は、新入生が1クォーター終了時に試験を受け、その成績発表は Semester制の科目と同時になるが、教員の裁量で6月の2クォーターの授業中に試験問題の解答をフィードバックできるので、早目に成績確認でき、良い成績を収めた学生は自信がつき、次の勉強の原動力になる。一方、成績の芳しくない学生は早めに自分の問題点が分かり、学習方法などの修正もできるので、2クォーターにそれを生かせる。更に大学での勉強法などを確認し、調整することができるので、他の Semesterの科目の学習へも好影響を及ぼし、離学者を減らす対策にも繋がる。

② 外国語習得の点に関して

週2回の授業でインプットの量が多くなり、効率よく記憶が定着できて、高い学習効果が得られる。

新しい単語に触れる回数が語彙の記憶にどのように影響するのかについては、2回でも効果があり、更に6回くらい触れると語を意識的に覚えようとしなくても、自然に身につく可能性があるとの研究報告がある⁴⁾。

千野栄一氏は『外国語の上達法』のなかで、「ある外国語を習得しようと決心し、具体的に習得に向かってスタートしたときは、まず半年ぐらいはがむしゃらに進む必要がある。これは人口衛星を軌道に乗せるまでロケットの推進力が必要なと同じで、一度軌道に乗りさえすれば、あとは定期的に限られた時間を割けばいい⁵⁾」と述べている。

以上のように、外国語の習得と記憶の関係については数多くの先行研究が発表され、外国語の習得には記憶が重要であり、記憶するには繰り返しが大切であることは明確であるので、初修外国語科目にとって短期集中型のクォーター制は正しく最適な授業設計といえる。

3. 今後の課題

教員の実感と実施後に行われた学生アンケートから見えてきた課題についても報告する。

3.1 学生アンケート調査から見えた課題

3クォーターの「中国語3」の終了後に行った学生アンケートにクォーター制の中国語については「大いに不満がある」と回答した者はいないが、「多少不満がある」と答えた学生は4人いる。その理由は下記の通りである。

- 5限というのが煩わしいから
- 仕方がないことは分っているが授業の時間が遅い。

- 他の授業を受けられないから。
- 後ろの人がうるさすぎる。

そして、「満足している」と答えた学生が「大いに満足している」を選択しなかった理由として、次のようなものがある。

- 「中国語3」は火、水で連続になったのは正直しんどかったですが、復習をせずに授業中で理解するには丁度良かったです。
- 週2回授業があるのは嬉しいが、火曜、水曜のように連続した日ではなく、ばらけさせていたら更に良かった。
- 週2回なら多くの時間を中国語に使えるから。両方とも5限だからちょっと疲れる。
- 授業早く終わって欲しかったから多いと感じた。
- 遅い時間の授業だったので疲れがあった。

学生の意見を考慮し次年度より教員の他の科目配置の調整によって火曜、水曜の連続の配置は解消されるが、初修外国語が5限目に配置されることの解消には全学的な配慮が必要だと思われる。

なお、アンケート調査の自由回答欄では、他の語学科目もクォーター制にすべきであるとか全学の科目が全てクォーター制を導入すべきであるという記述もあった。

3.2 大学の課題

①寝屋川キャンパスの初修外国語は全て5限目に配置されている。上記のアンケート以外でも学生から日々「5限が遅い」との意見を耳にする。例えば、和歌山、三重など遠方住まいの学生は帰宅時間が大変遅くなる。5限だとバイトに間に合わないために履修できない学生もいれば、4限目が空き時間になる学生もいる。更に4限目に体育の授業があり、毎回汗だく、へとへとで語学を勉強に来る学生もいれば、4限目に高宮校舎で実験があり毎回大幅に遅刻する学生もいる。そして受講生全員が夏は睡魔と戦い、冬は帰宅時に真っ暗である。そんな悪条件にも関わらず懸命に勉強している学生が多数いることに教員として胸を打たれ、5限開講の弊害を解消できるように全学的な配慮を切に願う次第である。

②クォーター制のメリットの1つとして海外留学がし易くなることがある。4学期のうち3学期分は国内で履修して、残りの1学期分を短期留学に充てることも可能だが、本学では4クォーターに短期留学のプログラムがない。折角学んだ基礎を積み上げることができないのが課題であるが、例え短期留学のプログラムを企画しても全ての科目にクォーター制を導入しない限り他の授業があるために留学にも行けない。クォーター制をいかに活用するかもこれからの初修外国語の教育効果を向上させるうえで重要な課題になってくる。更に全学の全科目でクォーター化を目指すかは大学の今後の課題であろう。

謝辞

クォーター制及び中国語検定試験を本学で実施する際にご支援頂きました工学部部長の松浦秀治先生に深く感謝の意を表します。そして本稿の執筆にあたり上垣公明先生にご助言を賜り、心より御礼申し上げます

注

- 1) 王少鋒『最短中検合格プログラム準4級』現代図書 2013
- 2) Heidi Dulay・Marina Burt・Stephen Krashen著 牧野高吉訳『第2言語の習得』鷹書房弓プレス 1999 pp.211-218.
- 3) 小池生夫編集主幹・寺内正典・木下耕児・成田真澄編集『第二言語習得研究の現在－これからの外国語教育への視点』大修館書店 2004 pp.302-303.
- 4) 石川圭一『ことばと心理』くろしお出版 2005 pp.93-96.
- 5) 千野栄一『外国語の上達法』岩波新書 1986 p.40.

